

兵庫県の地域多様性を学校教育で活かすにはどうしたらよいか

—兵庫地理学協会の参加型ワークショップから—

河本大地

KOHMOTO Daichi

兵庫県は、多様な地域から成り立つ県である。この条件をどう活かせば、学校教育において、より効果的な地理教育・地域学習ができるだろうか。筆者は2012年12月に、このテーマで兵庫地理学協会のシンポジウムを企画・実施した。本稿では、その中の参加型ワークショップ（ワールドカフェ形式）で参加者が発言した内容を整理し公開する。このワークショップでは、地域の抱えている課題、学校現場（特に受験指導中心の高校）の抱えている課題をそれぞれふまえ、地域を中心とした多様性の認識、ものの見方の習得のあり方を議論した。

キーワード：地理教育、地域学習、学校教育、地域多様性、ワールドカフェ、兵庫県

1. はじめに

私たちの生きる日本社会は今、混沌としている。高度経済成長期の成功モデルと同じような形で未来を切り拓くことは、困難になっている。こうした中、「地域」はどうあったらよいのだろうか。「地域」についてどう学べば、社会の未来を切り拓くことにつながるのだろうか。

本稿では、2012年12月に筆者がオーガナイザーとなり神戸夙川学院大学を会場に企画実施した、兵庫地理学協会特別例会のシンポジウム『「地域多様性」×学びの可能性 —地域多様性の県・兵庫ならではの地域学習・地理教育を工夫しよう—』の一部を記録し公表する。このシンポジウムでは、筆者が河本（2011、2014）などに記している、それぞれの地域がその地域らしさを発揮すること、地域どうしが支えあうことを柱とする、「地域多様性」の発想をとりいれた。

兵庫県は、「地域多様性」の県である。淡路・摂津・但馬・丹波・播磨の旧5国から県域の大部分が構成されており、県内における社会的・文化的な違いが大きい。また、政令指定都市・神戸や、大阪都市圏の一部、他県なら県庁所在地になってもおかしくない規模の都市である姫路

を有しているなど、地域（都市）システムにおいても多様性がある。さらに、日本海から瀬戸内海、さらには太平洋近くまで県域が広がっており、さまざまな気候風土、地形を有している。マスコミ等で「県民性」や「〇〇県と言えど・・・」といった話題が扱われることがあるが、兵庫県の場合は県域全体や県民すべてが共有できるものには乏しいのも特徴である。

このように、兵庫県は実にさまざまな地域から成り立っている。どんな工夫をすれば、この条件を効果的に活かした地域学習・地理教育ができるだろうか。地理の楽しさ、おもしろさ、重要性を広められるだろうか。これらのポイントを共有し、今後の可能性を拓ける場とすることを試みた。

当日は、下記のプログラムで進行した。小学校・中学校・高等学校・大学それぞれの学習内容や学習方法の特徴を意識した構成となっている。

13:00～13:10 開会挨拶

13:10～13:30 「地域多様性という発想と兵庫県 —問題提起として—」 河本大地（神戸夙川学院大学観光文化学部）

13:30～13:55 「小学校社会科における地域学習と

兵庫県の取り扱い方」 森本眞一（前・明石市立高丘西小学校長）

13:55～14:25 休憩・ポスター発表

14:25～14:50 「ムラ・ノラ・ヤマを通じた集落全体の理解 ―兵庫県立大学附属中学のプロジェクト学習を通じて―」 山崎義人（兵庫県立人と自然の博物館）

14:50～15:15 「高大連携授業で兵庫県立高校生の学習をサポートして ―神戸大生の立場から―」 佐伯健太（神戸大学・学部生）

15:15～15:30 休憩

15:30～16:50 ワールドカフェ形式による自由なアイデア出し「兵庫県の地域多様性を活かした学びの可能性」

16:50～17:00 閉会挨拶

参加者は45名で、高等学校と大学の教員を中心に、小中学校の教員、大学生、大学院生、高校生、公務員、個人事業主など幅広いメンバー構成となった。

本稿では、筆者がファシリテーターとなり設けた、ワールドカフェ形式による自由なアイデア出しの場「兵庫県の地域多様性を活かした学びの可能性を探ろう!!」の部分扱う。



ポスター発表の様子

2. 展開

この「兵庫県の地域多様性を活かした学びの可能性を探ろう!!」では、参加者はまず、メンバーの属性が偏らないよう「大人の配慮」をお願いする形で、4～6名ずつテーブルに着席した。その際、兵庫県美方郡香美町小代区でのフィールドワーク経験を持つ筆者のゼミ生が、1

～2名ずつ各テーブルに着き、それぞれのテーブルでのファシリテーター役を務める形をとった。これは、大学での地域学習に関する口頭発表を時間配分の関係で入れられなかったのを補うこと、県北部（但馬地方）に関する学習内容の発表やそこからの参加者があまり見込めないと想定されたこと、会場提供した本学にとってのメリットとして学生がさまざまな立場の方々の考え方に触れてコミュニケーション能力や地域・社会の見方を伸ばさせるのを期待したことによる。なお、ゼミ生は当日のポスターセッションで「小代における元牛飼いの思い」および「香美町小代区の無住集落・熱田の過去・現在・未来」と題する2件のポスター発表をおこなったため、参加者の多くはこれらを目にしていたと思われる。

ワールドカフェは、これを2005年に提唱したアニータ・ブラウンおよびデイビッド・アイザックスによると、「建設的なダイアログを育み、集合知にアクセスし、実践に移すための革新的な可能性をつくり出す、単純でありながら強力な会話のプロセス」（ブラウン・アイザックス, 2007, p.4）である。端的には、「カフェ」のようにリラックスした雰囲気の中で、少人数のテーブルごとに自由な対話をおこない、何度かテーブルに着くメンバーのシャッフルを繰り返して参加者のアイデアを集める会議手法である。

今回は「地域多様性×学びの可能性」というテーマのもと、ワールドカフェ形式を以下のように若干アレンジしたうえで展開した。

- ① 第1ラウンド： まずはこの日の発表等で得られた気づきや知識に基づく形で、参加者どうして話しながら、各自が自分のテーブルの模造紙にキーワードやアイデアを記していく。20分後、「異文化体験のための海外旅行」のアナウンスをし、1名を残して他のメンバーはできる限りばらける形で他のテーブルに移る。
- ② 第2ラウンド： 各テーブルで第1ラウンドの最後に残された1名が、「先住民」として海外からの旅行者にその「国」での議論を紹介する。そして、模造紙に第1ラウンドで記されている内容に加筆しながら議論を進める。その後、「母国に帰る時が来ました」等のアナウンスで、全員が第1ラウンドのテーブルに戻る。
- ③ 第3ラウンド： 第2ラウンドの「海外旅行」で各自が気づいたこと、理解したことなどを交換するとともに、第2ラウンドで「外国人」が「自国」の

模造紙に書き残した事項に目を通し議論を深める。

- ④ 各テーブルでの議論の概要と面白いアイデアを、全体でもシェアする。

以下では、各テーブルの模造紙に書かれた内容を整理して示す。

3. 地域の抱えている課題

順番的には、農村地域を中心とする経済的課題が挙げられたテーブルが目立つ。「働く場所のなさ(田舎)」、「しごと」、「くらしやすいまちづくり」、「田舎<都会」、「生活が成立しない」、「経済的原理が大きいのでは」などの指摘にそれが表れている。

その中で、「人工的なものが増えている」、「生物多様性」「地域の『本物』を残していく事」などが課題となっている。他方、「多様性は残すべきなのか」との疑問も呈されている。

こうした中、「今までの都市農村交流は限界！」との指摘がなされた。これは、「フォーマットを作ったのは？行政主導か…」、「ゆるキャラとか方法の画一化」、「ペンション村に若者がいない」など推進の仕方の問題、「グローバル化⇔ローカル化 資源化の不均等」、つまり観光・交流・教育等でとりあげられる資源の偏在など、さまざまな要因による。

しかしその最たる問題は、「地域の方はもてなしがしんどくなる」という点にある。これは、「地元の人以外の誰かがいないと続かない」、「地域の若者はいるが祭り事などに出ない」などの指摘にもつながる。交流が「地域の自律化の方向づけ」につながればよいが、そうなり得ていない事例が各所にみられる。



4. 地域の抱えている課題をふまえた地域資源の活かし方

「地域多様性×学びの可能性」という観点からみて上記の解決・緩和策となり得るものとして、多く挙げられたのは、地域での「仕事」の体験である。「その地域の仕事を体験」、「仕事体験を観光材料に」、「エコツーリズム 仕事の手伝い モチベーション 若者の力」、「地元は溝掘り、野焼きなどにボランティアとして入って手伝うと役立つ その情報提供の必要性」、「若者のextraordinary→tourism」などの記述は、それらに該当する。

これは、大学のゼミで地域と関わり、「岡山県美作市の) 地域おこし協力隊がやっている野焼き→元は仕事→学生にはおもしろいよ勉強」などと実感したり、「技術の継承 きねがつかない」、「今、私たちが地域で学んでいることを正しい形で下につないでいけるのか？」といった問題意識をもったりしている参加者がいたことなどによる。

他方、「中・高生が地域のことを学ぶ為には？」として、「高校の授業に取り入れる」ことのほか、「地域をor地域で、まちづくり部 →就活(につなげる)?」、「部活動×総合学習」、「トライやるウィーク」といったアイデアが出された。特に「運動部」に関しては、「兵庫県の中であれば全域の移動・交流が可能」なので地域多様性を体感する取り組みを積極的に導入できるのではとの意見もあった。

「仕事」や環境管理の体験を若者の趣味(興味・関心)にひきつけるために、導入に気を配ることの必要性も指摘されている。「生物(ウシしぼりたい、カメマニア)→しゅみ」、「関心=しゅみ(スキー場・温泉)→仕事」などである。「しめなわづくり」なども魅力ある体験内容として挙げられている。

その中で特に兵庫県については、「兵庫県の広さを活かす 自然の多様性 都会から田舎まで 山も海も」、「『気軽に』行って見れるものがたくさんある」、「『日本で最も美しい村』連合に加盟した香美町小代区を活かしたい」、「防災・ハザードを共通概念として」、「兵庫県の地域別にみていく」、「兵庫県という場の共有」など、多くの意見が出された。中でも複数のテーブルで議論が盛り上がったのが、ため池の活用である。「加古川のため池 トロの世界」、「ため池 …他の地域の方を巻き込んでいく→現地の人も気づく」、「ため池(カイボリ)に知らない人を巻き込む」ことで「再発見! →おもしろい『気づき』」につなげるなどのアイデアが出た。

こうした「本当は仕事」である、あるいは「仕事」で

あった内容を、「未知の体験」として提供することで、「様々な産業様式」を学ばせることができるのではなからうか。また、「空間・地域の人材を学習材として活用すること」は、「地域素材の活用」や「文化の発展」に資する。その際、「流行は若者達から 伝統はベテランから 相互交流」、「世代を超えた交流」に表れているように世代間交流が実現できる。あわせて「親にも知ってもらう」、「子どもの発信力強化」につながれば、「人と関わるのが好き = 趣味」と言えるほどのコミュニケーション能力も養えるかもしれない。



5. 生活の場に「よそ者」が入ることにより生じる課題と可能性

とはいえ、日常生活の場に「よそ者」が入ることに抵抗感を抱く住民がいるのは当然である。「地元の人に、何しに来たといわれた」、「よそも わかももの ばかももの」が地域づくりには必要と言われるがそこへの『『偏見』がシンプルな共通点』、「ヨソモノが受け入れられない」、「よそ者を受け付けられない 違いを認める必要性」といった指摘がなされている。その多くは、農村地域の地域づくりに関わっている学生からである。また、卒業研究等で研究対象とされることの多い地域や組織などを念頭に置き、「調査公害」という言葉を用いた指摘も2名からなされている。

こうした点については、「受け入れ側のプラスは?」、「仕事の邪魔?」といった視点を、地域にお邪魔する側が持つ必要がある。「広いスケールで (互いの日常とは) ちがう目線で話し合う」、「とことん話す」、地域住民側が「よそ者・研究者」を受け入れることによって「よそを知る」、「他者の目線」を持って地域を「俯瞰化」するこ

とのメリットを感じられるようにすることなどの必要性が挙げられた。

解決・緩和策として、「生活の地理学 →生活に密着する」、「生活・生業の地理学」も挙げられている。地理学という学問分野の特長を活かして地域住民の視点に立つことの可能性は、追求されたほうがよからう。また、「地元の人が何を求めるか」という視点から「野焼きは仕事!」として、先述の「仕事」をともにおこなうことによる学びを重視するというアイデアも示されている。「若者 (特に女子大生) の特権 不純?」にも、地域側のニーズをうまく活かした関わり方の可能性が垣間見られる。



6. 受験向け指導が中心となる高校における課題と可能性

高校の教員を中心に、受験指導との関係に関する意見が多数出されたのも特徴である。「受験科目に地理が入っていない」、「受験というしがらみ」、「受験 AO入試」、「高校生にも考えを持ってもらいたい余裕がない」、「学ぶ時間がない」、「学ぶ場がない」、「学びの場の確保」などが該当する。また、「輪切りされた同質の集団 →違う意見が新鮮」との指摘もある。

これらをふまえ、「受験と人間形成」が議論の俎上にあがった。「知識社会 →受験 →アンテナがにぶっている心の多様性 地域の仕事 観光化」、「アンテナが張れていない 『心』の多様性 相互受容」、「農林業を知る積み重ねが受験につながるような教育を」といった問題意識および意見が挙げられる。

とはいえ、「社会科の知識と乖離している」こともあり、地域多様性×学びに関しては、総合的な学習の時間に実施するのが適当とする意見が目立った。『『地理』よりは

総合学習で時間の確保、「小・中・高の総合学習で学ぶ必要性」などである。しかし、「総合学習の意義は何なのか?」、「受験に必要なかないかで意欲の変化」といった問題もある。そこで、「受験勉強 < 高校生の興味に向ける」、「提示 説明 主体的学習」、「遊びを通じた学びの充実」、「人間形成 ← 地域での遊び」、「総合学習の方法 教材としての地域多様性で、言語活動(技能) + 興味・関心という手法 → 論文」など、多様な進め方が提起された。「総合学習 → 大学での学習意欲」のために「本物に出会わせる」、「種をまく」、「意欲を与えること!」が重要という意見もあった。

「学校による違い 進学校 就職重視の学校」もあるので、地域多様性×学びのあり方は、学校現場おのおの実情に合わせて、まさに多様な可能性を検討したほうがよさそうである。



7. 多様性の認識、ものを見る目の形成に向けて

先述のように、高校での受験指導では「アンテナがにぶる」という問題意識が出されている。「物を見る目 = 『アンテナを張る』」という指摘も同様である。アンテナを頭から張った絵を描き、「人類 宇宙人化計画」と記したものもある。では、どうやったら「アンテナを張り、多様性を認識できるのだろうか。

まず、学習を通じて地域間の差異を認識することが挙げられる。「考えの共有、多様性の『認識』 担保する場が地域」という考え方である。これには2つのアプローチがある。ひとつは、他地域について知って、地域間の違いを認識することである。「地域を知る = よそを知る = 多様化に!」、「違いを知ること (隣の子、隣町の子、海外の子)」が該当する。他方、「共通性 → 基準に対し

てのズレ・違い」というアプローチもとり得る。

ただし、地域スケールの理解なしに地域多様性の理解はあり得ない。「スケール 位置付け」、「『地域』の範囲」、「スケール論」など、この点の指摘は多くなされた。「地域のスケールを目的に応じて適切に選ぶ」ことが大切である。

また、「他地域と比較して、その地域の特性まで見ることができるのか?」、「多様性はどのようにやって測るのか」、「指標は?」、「多様性には答えがない」、「Fieldによって学ぶ内容が変わる → 共通概念」といった指摘もあった。どういった切り口や「まなざし」で地域多様性をみるのかに留意する必要がある。「パターン」として、「提示する フィールドワーク 自身で研究」の3つを挙げた提案もあった。切り口やまなざしが異なる場合にも有効な、共通の学習パターンが見いだせるかもしれない。さらに、「学生たちに地域のことをイメージ化させていく(可視化)」事が必要との指摘もあった。このあたりは今後深めていく必要がある。

地域多様性を、認識や心の多様性と関連づけた見方もなされている。「認識の多様性なしに地域の多様性はない」、「地域多様性をみることが、人の心の多様性、人間の多様性をみることにつながる」、「『心』の多様性 相互受容」、「他者に対して偏見をもたないことにつながる」などがそうである。「違いを知ることの意義」、「多様な価値観」、「違いを見る、比較してみる link → 学習を実生活に」もそれに該当しよう。

また、「教育の多様性とのかけあわせ」が有効ではとのアイディアも出た。「教育者側が多様でないといけない」もそれに近い考え方である。この点に関連して、「多様性を考える上で学校間の積極的交流の必要性」を挙げ、「多様性 → 資源化 = 観光化 → 均質のものではない → 格差はどうしたらよいか」と逡巡したうえで、「差異の価値化 → ともに高めあえるようなもの 課題」と記したものがあつた。「両方が、もうひとつ高みにのぼれるように」との考えもこれに近い。それぞれの場での地域多様性×学びの取り組みを共有し、相互研鑽を図っていきたいところである。

このほか、「兵庫県のも多様性の自覚」が不十分との指摘や、「兵庫県の副読本教材をつくっては」という提案もなされた。兵庫県では、各市町の教育委員会が地域学習の副読本を作成しているが、県単位の副読本は一部の分野に限られている。この点が反映されていると言えよう。



8. まとめ

以上のように、この参加型ワークショップでは、地域の抱えている課題、学校現場（特に受験指導中心の高校）の抱えている課題をそれぞれふまえて、地域を中心とした多様性の認識、ものの見方の習得のあり方が議論された。地域の抱えている課題からは、持続・継承や関係性構築の観点から、地域の「仕事」を学びの内容とすることの有効性などが示された。学校現場に関しては、受験指導では得にくい学びの要素が地域にあるという視点から、総合学習や課外活動などの時間に地域多様性を意識して活用してはとの提案がなされた。また、地域多様性を活かした学びのかたちを創っていく際の課題や可能性も、いくつかアイデアとして示された。

今後は、兵庫県という地域多様性に満ちたフィールドを、どう小中高大や社会における教育・学習の場として活かしていくかが問われる。それは、地域が多様性をもった形で持続していくことにつながるし、学習者がさまざまなものの見方、考え方を習得すること、ひいては生き方の幅を広げることにもつながろう。そのためには、個々人での工夫に満ちた実践とともに、多様な学びの現場をつなぎ相互研鑽を図る場を積極的に創出していくことが大切である。

引用文献

ブラウン, A.・アイザックス, D. 著、香取一昭・川口大輔訳 (2007)『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る一』ヒューマンバリュー社 (Brown, Juanita and Isaacs, David (2005) : "The World Café: Shaping Our Futures Through Conversations

That Matter". Berrett-Koehler Publishers.)

河本大地 (2011) : ジオツーリズムと地理学発「地域多様性」概念—「ジオ」の視点を持続的地域社会づくりに生かすために—. 地学雑誌, 120 (5), pp.775-785.

河本大地 (2014) : 都市農村交流を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方—農村地域の未来可能性を高めるために—. 神戸夙川学院大学観光文化学部紀要, 5, pp.64-72.

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、多様な地域から成り立つ兵庫県において、より効果的な地理教育・地域学習をいかに推進すれば良いかという目的意識のもと、地域の人々・学校現場の教員・学生を交え、「ワールドカフェ」方式で「集合知」を生み出そうとした取り組みの結果をとりまとめたものであり、観光教育の観点からも、少なからぬ知見を与えるものである。様々な価値観と行動様式を持つ人々との意見交換の中で、学生が多くを学んだことも推測される。

筆者には是非、次の展開として、本稿で取り扱われたシンポジウムの中でも提起されたという、「地域多様性」の必要性や測定方法に関する概念的・方法論的問いに対する考察や、「ワールドカフェ」方式の教育手法が、具体的にいかなる形で学生の「成長」に寄与しているかを提示する論考を期待したい。

(担当: 観光文化学科 原 一樹)